

風と木 からすときつね

小川未明

青空文庫

風かぜと木き

ひろひろのほらのほら 広い野原は、雪ゆきにおおわれていました。無情むじような風かぜが、わが世よ顔がおに、朝あさから夜よるまで、野原のほらの上うえを吹ふきつづけています。その寒さむい風かぜにさまたげられて、木きの枝えだは、すこしもじつとしておちついて
 いることができません。しきりに振ふり起おこされては、氷こおりのような
 空くう気きの中なかに無理むりやりおどに躍おどらなければなりませんでした。

「もし、もし、北風きたかぜさん、そう私わたしをいじめるものではありません。あな
 さん。私わたしは、いま、春はるになる前まえの用意よういをしているのです。あなたが、
 この野原のほらをひとりよがりかに駈かけまわっていないさるのも、わずかな
 間あいだです。北きたの遠とおい地ち平へい線せんのあちらへ、あなたは、やがて帰かえって

いく身みではありませんか。そう、私わたしをいじめるものではありませんよ。」と、木の枝えだは、風かぜに向むかって叫さけんだのです。

北風きたかぜは、これを聞きくと、からからと笑わらいました。

「春はるになれば、私わたしは、それは北きたの遠とおくへ歸かえつてしまうのさ。そして、こんどは、南みなみからやさしい風かぜが吹ふいてきて、おまえさんたちの頭あたまを軽かるく、しんせつになでてくれるよ。けれど、あちらの池いけにきている雁がんが頼たのんで、いうのには、どうかもうすこし、元氣げんきよく吹ふいていてくれ、あんなほおじろとか、うぐいすとかいうような、人間にんげんのおもちやにされるような、女々めめしい、虚榮きよえい心の強つよい小鳥とりどもが、いばり出だすのは、しやくだというのだ……。」と、北風きたかぜは、木の枝えだに答こたえたのでした。

木の枝は、北風が力んだので、二、三べんも、細い身を揺す
 らなければならなかつた。

広い野原の上には、雲切れがして、青い鏡のような空が見えて
 いました。木の枝は、それを見ると、無上になつかしかつたの
 です。春になれば、毎日のように、ああした空が見られると思
 ったからです。そして、かわいらしい小鳥どもが、自分を慕つて
 やってくる。中にも愛嬌ものうぐいすは、どこからか、す
 ばしこそうな、あめ色の翼を、朝の日に輝かせて、早くから飛ん
 できて、

「おかげさまで、春がきました。あなたのいい香いは、野原の上
 をいっぱい漂っています。ごらんなさい。空の太陽までが、

うつとりとしてあなたに見とれているではありませんか。なんと
いう、あなたはいい香いのする花でしょう。もしあなたが、この
野原のほらに咲かなかつたら、この広い野原ひろのほらは、どんなにさびしいでし
ようか。私わたしばかりではありません。ほかの小鳥ことりたちも、この野原のほらに
は、影かげをひそめて、いつまでもここは、冬ふゆのままの景色けしきでいるに
ちがいないのです……。」

木の枝えだは、こういつたうぐいすの言葉ことばを思い出して、

「なに、私わたしは、寒さむくたつて、かまわないけれど、小さな鳥ちいとりたちが
冬ふゆに飽あきています。私わたしが、花はなを咲さかせないうちには、こまどりも、
うぐいすも、おしのように、どこかのやぶの中なかにすくんでいなけ
ればなりません。それを思うと、早はやく、花はなを咲さきたいばかりに、

ついであなたにも訴えたわけでした。」と、木の枝は、風に向かつていいました。

すると、北風は、さげすむように、ふたたびからからと笑いました。

「ほんとうに、うぐいすがそんなことをいった？」

木の枝は、なつかしように、

「愛嬌ものうぐいすは、ほかの鳥とちがって、美しいばかりでなく、心もやさしく、私には、しんせつなのです。」と、答

えました。

北風は、かつて、雪を家来にして、野原を駆けていた時分、一本の棒の上に、うぐいすがとまっています、北風を見て、さも

感歎しながら、

「北風さん、なんとというお勇ましいんでしよう。数限りない

雪の家来がおありなさるほかに、あの大きな雁や、野がもまでが、

みんなあなたの家来なのです。やがて、あなたが、北の故郷へ

引き上げなるときには、この雪も、野がもも、雁もあなたのお

伴をして、いつしよにいつてしまうのでしよう。ただ、不幸なこ

とに、あなたには、私のような、かわいらしい唄うたいがお伴に

いないことです。私は、あなたが去られると、この野原の女王

になります。そして、私が、一声かけさえすれば、あのおじい

さんのような、無骨な枯れ木までが花を咲くのですよ……。」と

いったことを、北風は思い出した。それで、北風は、木の枝

をさげすむように笑ったのでした。そして、北風は、うぐいすのいったことを、木の枝に語ったのです。

木の枝は、うぐいすが、だれに対しても、いいかげんなことをいうので、びつくりしました。

「そんなことをいいましたか？ 私をおじいさんのような無骨者だと……、そして、自分を、野原の女王だと……。」

木の枝は、そんなら、自分は、じつと寒い風をも我慢をして、いつまでも花を咲かすにおいてやろうと思いました。そうしたら、どんなにこの野原は寂しいかshれない。いつまでたつたつて、春がこないにちがいない。そうしたら、うそつきのうぐいすはどうするつもりだろう……。

「北風さん、わたしは、我慢をします。どうぞ、もつともつと強く吹いて、雪を盛んに降らせてください。」といいました。

北風は、それから、しきりに募りはじめました。

からすときつね

からすが、どこからか飛んできて、この木の枝に止まって、まっ白に、雪のつもった、野原をながめていました。

「なにをそんなに考えこんでいるのですか？」と、ふいに、声をかけたものがあります。

からすは、振り向くと、そこに一ぴきのきつねが雪の上にくまっく、木の上を見ていました。

「きつねさんですか。私わたしが、去年きよねんの秋あき、ここへやってきたときに、だれか犬いぬを捨てたものがあつた。犬いぬは、クンクン悲かなしそうな声こえを出だして鳴ないていました。すると遊あそびに、野原のほらへやってきた子供こどもたちが見みつけて、犬いぬのために、小さな眠ねむる場所ばしよを造つくってやって家うちへ連れていつたら、しかられるから、みんなが食たべ物ものを持もつてきて犬いぬにやろうということなどを相談そうだんしていたのを見みましたが、いま、その子供こどもたちの造つくった小屋こやが雪ゆきの下したになつてしまつたと思おもつていたのでですよ。」と、からすはいいました。

きつねは、不思議ふしぎなことを聞きくものだと思おもつた。その小屋こやなどは、なんでもないことだが、捨すてられた犬いぬは、どうなつたらうと思おもつたのです。きつと、雪ゆきの下したになつて、死しんでしまつたにちが

いない。だが、そんな捨てたような犬を連れて行って飼っておくものがあるう？ ……きつねは、犬を自分たちの敵と思つているので、平生心から犬を憎んでいました。それで犬に対して、好意のある考えが浮かんでこなかったのです。「きつと、その犬は、雪の下になつて、死んでいきますでしょう。」と、きつねはいました。

すると、からすは、きつねのいったことを聞きとがめて、「死んで？ いえ、その犬は、とうとうその子供の中の一人が、家へつれていつてかわいがつて飼っています。先だつて村へいつたとき、その犬が楽しそうに遊んでいるのを見ました……。」

「物好きな人間もあるものですね……。」と、きつねは、いっ

た。

「わたしは、犬の^{いぬ}ことを^{かんが}考えていたのでは^{こと}ありません。子供^{こども}たちが造^{つく}

つた小屋^{こや}は、どうな^{おも}つたらうと思^{おも}つていたのです。」

「小屋^{こや}なら、雪^{ゆき}が消^きえたら、出^でてきますよ。」

「いいえ、雪^{ゆき}が消^きえたら、あの小屋^{こや}は、流^{なが}れてしま^まつて、川^{かわ}か、

海^{うみ}へい^いつてしま^まうでしよう……。」

「からずさん、そんな気^きづかいは^ありません。それは、不思議^{ふしぎ}なもの^{もの}です。そ^そつくり、そのま^まま地^ちの上^うに残^{のこ}つていま^ますよ。」

きつねは、自分^{じぶん}たちが、秋^{あき}から、冬^{ふゆ}になる^あいだは^たけ

わらの中^{なか}に眠^{ねむ}つていた^あいだは^たけ

を埋^うめると崖^{がけ}の穴^{あな}に移^{うつ}り、来^{らい}年^{ねん}雪^{ゆき}が消^きえた時^じ分^{ぶん}に、元^{もと}のわらの

あたりへいつてみると、わらはそのままになっていることを知つたからです。

「この雪が解けて、どんなに大水が出るかということ、あなたは知らないからです。」と、からすはいつて信じなかつた。

春になつて、北風が、いつしか南から吹く風になると、雪はどんどん消えていった。そして、からすのいうように、川といふ川が、水でいっぱいにあふれるのです。しかし、その水は方々から、ほとんど、気づかないほど、静かに、ゆるやかに、雪が解けるままに流れて、集まつてきたもので、けつして、畑にあるつみわらや、また野中のどんな小さな板くずをも流すものではなかつたのです。それをなぜ、からすが、そういつたかというの

に、からすは、いつか秋あきの末すえに、どこからか蒸むした芋いもを拾ひろってきて、穴あなを掘ほって埋うめておいた。そのうちに雪ゆきが降ふってしまって、掘ほり出だすひまがなかったのです。そして、雪ゆきが消きえて、そこへいつてみたときは、なんにも残のこっていません。からすは、芋いもが水みずのために、流ながれてしまったと思おもったのです。もぐらが、冬ふゆの間あいだに、それを食たべてしまったことを知しらなかつたからです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷発行

初出：「赤い鳥」

1927（昭和2）年4月

※表題は底本では、「風《かぜ》と木《き》」からすときつね」
となっております。

※初出時の表題は「風と木、鴉と狐」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：雪森

2013年5月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

風と木 からすときつね

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>